# 論文を読もう、研究を理解しよう

- コツは「研究」を知ることにあり-

南山大学 浦上昌則

論文を読みたい。できれば自分でも書きたい。では、どうすれば読めるように、書けるようになるのか? どうすれば、学会誌に掲載されるような論文が書けるのか?

多くの学会員にとって、とても気になる点ではないだろうか。しかし、この点について適切で有用なアドバイスをすることは容易ではない。大学教員としての私は、読む際は「習うより慣れろ」、書く際は「学会誌に掲載された論文をまねて」と学生に言い続けている。しかし、この漠然としたアドバイスは、なかなか学生に届かない。つまり、「慣れろ」「まねろ」と言われてできるほど、それは簡単ではない、ということなのだろう。

論文の読み方や書き方を身につけるのは、スキルや運動の学習と同じではないかと感じている。いわゆる観察学習(モデリング)の理論などで説明できるのではないかと考えるが、初心者がプロ選手の行動(積み重ねの結果)を観察し、自分のものにしようとしている場合と同じ難しさがあるだろう。学生ならば、教員(研究者)から指導を受ける機会もあるだろうし、ベテラン研究者との協同研究に参加すればその過程を体験することもできるだろう。しかし、そういう機会がない場合は、発表された論文情報だけを頼りにしなければならない。完成された論文を読むことで、論文を読む力や書く力が身につくだろうか。

困難なこととは理解しつつ、論文を読むこと、それをまねて書こうとする経験は無意味では無いと信じたい。現在、精力的に論文を読み、書いている人の多くも、そうやって技術を身につけたはずである。個別に見れば、学習が成立した事例をあげることは難しくない。Banduraの観察学習の過程の最初は注意過程とよばれ、モデルとなるものと、観察者の両方に対して言及されている。今回の講習会では、モデルとなる論文の特徴と観察者の特質の両者に注目し、どこにどういう目を向ければ、論文を読む、書くという技術の獲得につながりやすいのか(観察学習がすすみやすいのか)という観点から話を進めていきたい。

#### 1. 論文に関する基礎知識

まずは、読もう、書こうとしている文書の特徴を確認するところからはじめなければならないだろう。論文とはどういう特徴をもった文書なのかという点である。

学生の卒業論文などをみていると、時に、論文ではなく「書籍」的になっていると感じる ものを見つけることができる。これは「まね」の影響だと思われるが、論文でないものをま ねしても論文を読む、書く技術には近づきにくいだろう(無意味とは言わないが、かなり上 級の学び方)。

# 論文とは…

辞書では、学術研究の成果を理論的に述べた文章、などといった説明もされていますが、「論文」とは概ね、研究を通して得られた知識・知見を他者(読者)に伝えるために、特定の形式で記述された文書といえると思います。ここで「研究を通して得られた知識・知見を伝える」という部分の理解の仕方が、ひとつのポイントになります。それは、結果として得られた「知識・知見だけ」ではありません。「どのような研究を通して得られた知識・知見なのか」という部分を含んでいます。この点を開示することは、結果のねつ造を防いだり、追試やさらなる研究の発展に役立つ情報を提供することになります。

#### 2016年研究推進委員会企画

『キャリア教育研究』掲載の論文を読む-基本的統計資料の理解を中心に- より http://jssce.wdc-jp.com/wp-content/uploads/20161106kenkyukai.pdf

# 戸田山『論文の教室』より

鉄則 15 論文とは論文の形をした文章のことなのである

<u>鉄則 5</u> 論文には次の 3 つの柱がある。与えられた問い,あるいは自分で立てた問いに対して,一つの明確な答えを主張し,その主張を論理的に裏づけるための事実的・理論的根拠を提示して主張を論証する。

ただし、実際の論文の構成は以下のようになる場合が多い…

与えられた問い,あるいは自分で立てた問いに対して,答えを出すために必要な事実的・理論的根拠を提示し,一つの明確な答えを主張する。

鉄則8 結論の正しさにこだわるな。重要なのは論証の説得力だ。

## 2. 研究に関する基礎知識

先に記したように、論文は、研究を他者に伝えるために書かれるものであり、一定の形式をもっているものといえる。ならば、論文を読み、書けるようになるには、研究とは何かということも知っておかなければならないだろう。これが論文を読み、まねる際の鍵になる。

# ①研究の目的

研究の目的は、一般的に、現象や事象の原因・原理を明らかにすること(説明できるよう

になること)。また、原因・原理の理解に基づいて予測や制御を可能にすること。

ならば…

研究動機は、原因・原理(もしくは予測や制御)について「知りたい」、「わかりたい」、「はっきりさせたい」…といった点にある。

研究という行為は、「目に見える現象の背後に隠されている原理・原則を、どう発見するか」(伊丹, 2001)という、知り方、知る過程のこと。

つまり、研究は、原因・原理(もしくは予測や制御)について「知りたい」、「わかりたい」、「はっきりさせたい」…といった動機から、そのため(原因・原理(もしくは予測や制御)を明らかにするため)に、知るという過程を歩むもの。<u>論文には、これらのことが書かれている(換言すれば、これらのことしか書かれていない)</u>。

# ②科学という知り方

研究が導くものは新しいこと、より正しいことであることも必要になる。知ることができたものが、新しい、より正しいということを担保できる知り方として、現在は科学の考え方を活用することが多い。

Ray (2003) などの認識論を参照すると、「知る」「わかる」道筋には以下のようなものがあるといえるだろう。

固執:私がそう思う

権威:本に書いてある/偉い人が言っている

常識 (common sense): 私やみんなの経験や知覚に合致している

理性:哲学的。論理からみて正しく導かれている

科学:科学的手法によって

前提として、たとえば「固執」によって導かれた知見よりも、「科学」によって導かれた知見の方が、新しく、また正しいという合意(パラダイム)が必要であるが、その合意がある(少なくとも研究者間にはそういう認識が共有されている)がゆえに、科学の考え方が活用されているといえる。

## ③科学という知り方の特徴

何を科学的とよぶかについては様々な指摘があるが、その中に「事実」「客観的資料」を 用いた「実証的」なものという特徴を指摘できる。「実証的研究(実証研究)」というような 表現がしばしば使われるが、これは「経験や観察を通して知識を得る方法」を指している。 これが、科学という「知り方、知る過程」のこと。

人を対象とした実証的研究を分類すると

実験研究: 特定の条件を操作して状況を作り出し、そのもとでの人間の行動を検討する。

実践研究: 現実場面における介入や支援の実践を検討する。操作を行うので実験研究の一種ともいえるだろう。

調査研究: 実験研究のように操作を行わず,自然な状況下での人間の行動を検討する。

研究に「なぜデータが」「なぜ実験が」「なぜ調査が」必要なのか、と問われることもあるが、その質問には答えられない。科学的に知るならば、証拠となる資料(データ)は不可欠のものだからである。逆にいえば、そういう疑問(懸念)をもつならば、科学的以外の知り方を採用すればよい(たとえば固執的な知り方から、自分の経験をまとめるとか)という話となる。ただし、その知り方をして導いた結論が、研究としてひろく認められるか(学会内で認められるか)どうかはわからない。戸田山のいう「説得力」と関連する。

# ④仮説と仮説演繹法

こういう科学的な知り方においては、「仮説」が極めて重要な役割を担う。仮説は、「ある 現象を統一的に説明するために立てられる仮定、命題」というような意味。なお、ここでい う仮説は、原因・原理の追究のためのもので、個別性の説明を目的としているわけではない。 そのため、「統一的に説明」という部分が重要になる。

この仮説を用い、データをもとに新しいこと、正しいことを言うための代表的な枠組みが 仮説演繹法(次図参照)。

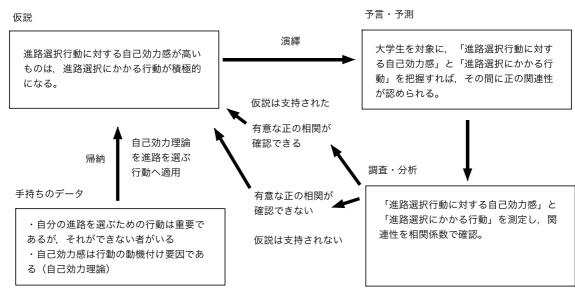
仮説演繹法は、すでに明らかになっている知見や、他の様々な情報から帰納法を用いて仮説を導く。その仮説を検証するために演繹法を用いて検討可能な事例に当てはめ、「仮説が正しければこうなるはず」という「予測」、「予言」を検討する。実験や調査、観察を行ってデータを集め、「予測」、「予言」と一致する結果が得られれば「仮説は正しい」と判断する。ただし、厳密にいえば、結果によって確からしさが高まるということに留まり、<u>絶対に正しいということ</u>と担保できる方法ではない。

この仮説演繹法に代表されるように、仮説の正否を検討しようとする研究を仮説検証型 とよぶ。対して、すでに明らかになっていることが極めて少ないなど、仮説を導くに適切な 帰納が困難な場合、調査等を行って手持ちのデータを増やし、仮説を導くこと自体を目的と した研究もある。これは仮説生成型の研究とよばれる。

#### 仮説演繹法の型の例

実験研究(戸田山『科学哲学の冒険』より)

#### 55ページの図を紹介



調査研究(実験と異なり、操作・介入を行わない)

仮説演繹法は、実験研究はもちろん調査研究でも用いられる枠組みであるが、データを用いた研究はそればかりではない。仮説生成型の研究でもデータを利用するが、仮説生成型には、「仮説検証型の仮説演繹法」というような決まった方法はないといえるだろう。仮説生成を目指して質的データを分析する場合の方法はこれに含まれる。量的データの場合、論文では「探索的|「探索的検討|「探索的研究」などという用語がしばしば用いられる。

探索的な研究は、「事前に特定の仮説を持たず、データから仮説を見出そうとする」と紹介されることもあるが、これは誤解を生みやすい説明ではないかと思う。事前に何の仮説もないわけではない。既知の知見、見通し、ベースとなる確からしさの高い仮説はあるが、詳細な様相は不明なので、データから確認し、より詳細な仮説を提起しようとするような研究という方がよいかもしれない。

たとえば、「進路選択行動に対する自己効力感と進路情報収集行動の探索的検討」という ような架空の研究を想定する…

既知の知見として,自己効力感は行動に影響すること,進路選択行動に対する自己効力感は, A, B, C の 3 つの因子から構成されていることがわかっているとする。ここから,進路選択行動に対する自己効力感が進路情報収集行動に影響しているとは妥当な(無理のない)推論として導けそうだが, A, B, C の因子ごとに検討すると, どの因子が, もしくはすべてが影響しているのかどうかはちょっとあやしい…, といった場合。

こういった場合, 仮説検証的研究を行うなら, A, B, C の因子ごとに, 進路情報収集行動と関連するかどうかについての仮説を立て, その検証を行うことになる。つまり仮説(こ

れを導く推論過程も含めて)を目的部分に明記する。もしこれが無理ならば,仮説検証的な研究はできない。

他方、探索的な検討であるなら、それぞれの因子ごとに、進路情報収集行動との関連の程度をデータから確認する。目的部分では、進路選択行動に対する自己効力感が進路情報収集行動に影響しているという前提は明記されるが、A、B、C 個別の仮説は示されない(示せない)。そのため、得られた結果は、新しい仮説(詳細な仮説)の提示(たとえば、A は進路情報収集行動と関連する、C は進路情報収集行動と関連しない、など)と見なされる。

すなわち、問題と目的部分に仮説に関する記述があれば、すべて仮説検証型というわけではない。ひとつの研究の中に、仮説検証的側面と、探索的側面の両方をもつ研究も多く、こういう場合、それらを見分ける(別物として理解しておく)ことが重要。『キャリア教育研究』に掲載されている論文の多くは、探索的研究、もしくは両面をもった研究といえるだろう。

なお,事例研究や文献研究の一部も探索的研究に含まれる場合が多い。ある現象を統一的 に説明できる仮説を生み出そうとする目的を持った研究は,ひろく探索的な研究といえる だろう。

## ④仮説を導く帰納法

仮説演繹法では、未知の「原理・原則」について、経験や先行研究をもとにした帰納的推論から仮説を導く。研究の極めて重要な鍵になる部分。帰納法を使うことで、新しいこと (原理・原則)を提起できるのだが… これを「難しい」という人が多い。

できる人には特に意識しなくてもできる思考だろうが、コツというか、頭の使い方がある ので、できない人には、それを知らないとかなり難しいだろう。また論文の問題と目的部分 で、この帰納的推論の過程をきちんと文章で説明しなければならないところにも注意。

たいていは以下のいずれか(もしくは複数)を使う(戸田山参照)。

- · 枚挙的帰納法
- ・アブダクション (仮説形成)
- ・アナロジー (類推)

実際には、枚挙的帰納法は少なく、アナロジーやアブダクションが多い。アナロジーやアブダクションという頭の使い方を知らないまま仮説を立てる(適切な帰納的推論をおこなう)のは、たぶん恐ろしく難しいだろう…。やみくもに仮説を考えようとしても、時間と労力の無駄になることが多いので、アナロジーやアブダクションという頭の使い方を理解し、どのように使うのかを先行研究をまねることで身につける、という流れをおすすめしたい。仮説演繹法の型の例で、戸田山が示している仮説演繹法の説明で使われている帰納がアフブダクション。調査研究の説明で使われている帰納がアナロジー。

もちろん、「何となく…」といった「直感」や「勘」も仮説を導く重要な鍵になるが、これらに依拠する説明を仮説とよぶことはできない。この説明の仕方(知り方)は前述の「固執」や「常識」の様式といえ、それを「科学」にのせるには、仮説が成り立つ説明を与える必要がある。科学の観点からすると、「直感」や「勘」という説明は、推論という思考の停止ともみなせる。

「経験から」という説明も、同様に仮説とよぶのは難しい。経験や先行研究をもとにした帰納的推論から仮説を導くのであり、「経験から」という説明だけでは、帰納的推論部分がない(もしくは、表現されていない)。枚挙的帰納法のように十分な例と規則性があれば別だが、「経験から」というだけでは、説明不足と指摘される状況といえるだろう。ただし、アブダクションを行う手がかりともいえるので、「経験からだから…」と思考を止めず、さらに考えるべきところかもしれない。

# ⑤仮説と考察

仮説演繹法では、先の図のようにして仮説の正否が判断されるが、論文では、通常、さらにこの判断に関連した考察が展開される。英文論文では、Discussion という見出しが使われるように結果をもとに仮説についての議論を行う。

仮説通りの結果になれば、仮説が正しいということを示すのでほとんど議論の余地(必要性)はない。仮説が支持されなかった時はしっかりと議論することが必要だが、この際に注意すべきことがある。なぜ仮説が支持されなかったのかを議論する時、いきなり結果の再解釈から、それに合う別案(新しい仮説)を提示しようとするのは論理的でも合理的でもない。その別案を正しいといえる根拠はあるだろうか?

仮説が支持されなかったのは、(手持ちのデータが正しければ)仮説を導く帰納の過程が正しくなかったからである(先の図で確認)。この過程は「問題と目的」部分で説明している(はず)ので、そこで述べた過程における推論過程の問題点を検討するということが、より正しい説明に近づくためにもっとも重要になる。この問題点を明確にできるところが、探究に科学を使うメリットのひとつといえるだろう。

結果が仮説を支持しなかった場合、ここまでは、たいていは論文に記述されている。それを踏まえての別案(新しい仮説)提示は、オプションといえる。もちろん、そこで提示された別案(新しい仮説)は、正しさが担保されていないものに留まる。仮説が支持された場合の結論と、支持されなかった場合に提示された別案はまったく別の確からしさになるので、その読み取り時には十分な注意が必要。考察部分でよく使われる「…が支持された」と「…が示唆された」は、全く違う意味である。

探索的な研究の場合、考察は結果を根拠として現象を適切に説明できる仮説を導くために議論が行われる。そこで導かれた結論(仮説)は新しく提示されたものなので、仮説検証型の結論とはまったく性質が違う。

難しいのは、仮説検証的側面と、探索的側面の両方をもつ研究の場合だろう。検証された仮説と、提案された仮説が考察の中で混在するので、正確な理解に戸惑うかもしれない。しかし、これを難しく感じるのは初心者のうちだけでもある。仮説検証型の研究で仮説が支持されなかった場合の別提案時と同じで、文章中に明確なサインが埋め込まれている。「…が支持された」、「…が示唆された」などといった表現である。ここを読み違えなければ正しく理解できる。

以上は読み取り時におけるポイントだが、同時にこれは考察を書く時の留意点でもある。読み取り時に「…が支持された」「…が示唆された」などが鍵になるため、断定や推測の表現(どの程度の確からしさなのかを示す表現)を適切に用いなければ、研究結果が正しく伝わらない。ここのミスは、論文執筆の際には致命傷になる…。

# ⑥量的データ/研究と、質的データ/研究

データの種類は質的/量的に区別される。研究において、いずれのデータ(もしくは両方)を収集するかは、研究の目的によって決まる。質的な側面について検討したい場合は質的データを、量的な側面について検討したい場合は量的データを収集する。先行研究をまねる際、絶対にやってはいけないのは、好き嫌い、得意不得意で量/質のアプローチを決めること。なお、量と質の違いは、量(代表的なのは、頻度や程度)にならないものが質といえる。

このように、たとえ同じ現象を研究していても、質的な研究と量的な研究は違う側面を 扱っているのである。正誤、優劣を比較できるようなものではなく、現象の全体を理解す るために相補うようなものといえる。

なお、質的であろうが量的であろうが、経験や観察によるデータを使えば、(実証的)研究になるわけではない。研究として適切な方法(換言すれば、その方法ならば、新しく、また正しいことがいえるという合意(パラダイム)にそったもの)で、妥当なデータを集められていることが条件となる。そのため、「データがあるから研究してみよう」という姿勢はまったくおすすめしない。これが成功するのは、研究について十分な経験がある人が、適切なデータに出会えたという幸運に恵まれた場合のみ、といえるだろう。こういうやり方をしていると、研究をつまらなく、難しいものと誤解してしまう…

#### 質的研究に関して参考になりそうな情報

日本質的心理学会

http://www.jaqp.jp/abstractJJQP.html

大谷尚 2017 質的研究とは何か 藥學雜誌, 137, 653-658.

https://doi.org/10.1248/yakushi.16-00224-1

灘光洋子・浅井亜紀子・小柳志 2014 質的研究方法について考える: グラウンデッド・セオリー・アプローチ, ナラティブ分析, アクションリサーチを中心として 異文化コミュニケーション論集, 12, 67-84.

http://doi.org/10.14992/00011112

松尾睦ほか 2011 質的研究について考える 経営行動科学, 24, 211-249. https://www.jstage.jst.go.jp/article/jaas/24/3/24\_211/\_pdf

#### 3. 調べ学習は研究か?

調べ学習は、何らかのテーマについて調査をし、結果や自分の意見をまとめて発表するような学習と紹介される。形は研究と同じともいえるため同じようなものと解されることもあるが、明らかな相違点もある。たとえば卒論等に対して、「これは研究ではなく、調べ学習だよね…」などという指摘がしばしばなされる。数年間それを専門に学んできた学生でも勘違いする(違いを理解できない)し、社会人大学院生などでも、入学時点では区別できていない人を多く見かけることから、かなり一般的な誤解といえるかもしれない。そして、研究ができない(研究として認めてもらえない)ひとつの大きな原因ではないかとも考える。

調べ学習ではあまり重要視されない(と思う)が、研究では重視される相違点として、2点を指摘しておきたい。そのひとつは、調べ学習は「テーマ」を設定するだけでできるだろうが、研究では「テーマ」を、研究を通して回答する「問い」(リサーチクエスチョンなどとよばれるもの)に整形しておかないと実行できない。テーマとは、議論の基調となる考えとか、主題、題目といった意味であり、それ自体は疑問、問いではない。「テーマ」と「問い」はまったく別物であり、また研究は自問自答の形式をとるので、問いがないと成立しないのである。

テーマが決まれば、さまざまな情報を集めることはできるし、それをまとめることもできる。それに対して自分の意見を述べることもできるので、調べ学習としては成立するのだろう。しかし、これでは問いもなく、それに対する回答も提示されていないので、それは研究とはよべないのである。

もうひとつは「新しい」知見が得られているか、という点である。研究でいう「新しい」は、私はもちろん、他の誰にとっても新しいということ。私にとっては「新しい」が、他の人にとっては既知のことは、研究でいう「新しい」ではない。本や資料を調べたり、人に聞きに行ったりしてデータを集め、それをまとめる行為の結果は、私にとっては新しいが、他の人にとっては既知のことの集大成になりがち。それゆえ、研究ではない、研究になっていないと指摘されることがある。

「新しい」と主張するには、先行する知見を調べ、「まだ指摘されていない」ことを指摘するしかない。学生は、学習の際に「何がわかっているのか」については敏感で目を向

けようとするが、「わかっていないこと」には非常に鈍感で、無視するといってもよいほどと感じる。調べ学習を研究にするには、「私は知らない」という視野ではなく、共有されている知識として「何がまだわかっていないのか」に目を向けるという意識の切り替えと、「何がまだわかっていないのか」を知るためにも調べる、という意識が必要だろう。

## 4. 論文を読み、まねるためのプロセス -現在、授業で行っている方法-

授業では、以上のような研究の話題を伝えることと並行して、実際に論文を読み、記録するという作業を求めている。もちろんそれを通して、論文読むこと、まねて書くことができるようになってほしいと考えているためである。以下では、その概略(練習過程)を紹介し、その後で実際の論文を読み解いてみる。

なお、論文は学会誌に掲載されているもの(査読付きのもの)を推奨している。特に最初の内は、紀要などに掲載されているものには手を出さないようにと伝えている。紀要の論文は玉石混交で、まねてほしくないもの、絶対にまねてはいけないものもある。初学者は論文の形をしていれば、それはちゃんとした論文、研究と思い込んでしまいがちなので、信頼できるものか、まねすべきものかを見抜けるようになるまでは手を出すべきではないだろう。

また大会発表論文集掲載のものは対象外にしている。書き手になるとわかるが、発表論文 集の原稿には述べるべきことをすべて記すことはできず、あくまでも発表のための資料と いう位置づけである。また査読もない。短いので、一見読みやすそうにも見えるが、これも 初学者がまねるべき論文ではない。

# ①精読と多読(精読から多読へ)

#### 1) 精読(1編)

論文を読み、レジュメを作成する。レジュメは、研究のことをよく知らない人に伝わるような詳細なもの。数人のグループでシェアし、他者の論文、レジュメを読みコメントを付すこと、付されることを経験し、読み方、まとめ方、表現の仕方などの適切さを確認し、レパートリーをひろげる。

#### 2) 多読

第1段階(3編以上。時間的には1~2週間に1編くらいのペース)

以下のポイントを示したうえで、それを意識したまとめ (読書記録) を作成する 以下の内容について、A4 用紙 2 枚以上にまとめる

- 1. 論文の概略として、以下の5点についてまとめなさい
- ・著者がその問題、テーマをとりあげ研究を行った理由は何か
- ・研究目的や仮説は何か
- ・目的や仮説がどこまで結果によって裏付けられたか、あるいは裏付けられなかっ

たか

- ・考察されたことの要点は何か
- ・あなたが特に注目していた点はどこで、それについてはどうだったか。
- 2. この論文を読み、理解するために自分で調べたことがあれば、その要点(何について調べ、それはどういうものであったのか)を記しなさい。
- 3. この論文・研究の着眼点、研究方法、分析手法などで、興味深い点、参考にしたいと思う点などを、理由を含めて記しなさい。
- 4. この論文・研究の問題点、課題を指摘したうえで、あなたならなどのように対応するかを記しなさい。

## 第2段階(6編以上。時間的には1週間に1編くらいのペース)

ポイントは示さず、形式や内容、分量などは任意とし、<u>自分が研究をすすめていくための</u> まとめ(読書記録)を作成する。まとめ方は随時修正すべきと付言している。

#### 効果のようなもの

第2段階目を行った後に気付いた点の報告を求めると、精読や多読の1段階目では、論文を読み、理解することで精一杯だったことがわかる。意識が(研究ではなく)論文の内容を理解することにとらわれ、それ以外への留意が欠ける。新たな発見は様々にあるようだが、構造化されておらずバラバラなため、研究を全体的に理解することや論文をまねるために使えるかどうかは微妙な感じ。

第2段階を経験すると、短期間に複数の論文に目を通すためか、論文間の異同に目が向くようである(読みやすい論文と読みにくい論文、など)。自分の研究のためにという条件をつけることで、自分で記録を読み返すことが意識化され、まとめ方に意図と工夫がみられるようになる。また、論文に共通する構造がわかるようになると、特に意識を向けなければならない部分(意識を向けたい部分)が明確になり、読む時間が短くなる、といった報告がかなり見られるようになる。

以上のような変化が全員に生じるというわけではないが、かなり多くの学生が変化(途中で気付いたこと、意識的に変えたこと)を報告してくる。また読む際に意識を向ける部分をコントロールできるようになる(接続詞の使い方に注意して読んでみた、調査対象者に注意して読んでみた…)ような変化もうかがわれる。これは、課題として「数編の精読と、他者のレジュメを参照すること」を求めていた頃には見られなかった変化のように思う。「習うより慣れる」を実践する形として、「自分のための読書記録をつけながら、短期間に多読をする」というものを推奨してもよいように思っている。

#### ②杉本論文を読む

ここからの内容は,精読の第2段階のスタート時に行う講義をもとにしている。

論文を段落単位でまとめ(要約し), それらをつないでいる流れを把握するという課題を 提示し, その課題の説明として講義を行う。

●『大学生の就職に対するイメージの構造』 杉本英晴 2012 年 キャリア教育研究 第 31 巻 p.15-25.

#### 論文全体の構造的特徴

この論文の中央大見出しを並べると、「問題と目的」、「研究 1」、「研究 2」、「まとめと今後の課題」、「引用文献」となる。一般的には「問題と目的」、「方法」、「結果」、「考察」、「引用文献」の5つ程度が多いが、この論文は2つの研究で1つの論文が構成されている。そのため、「研究 1」「研究 2」 それぞれの中に「目的」「方法」「結果」「考察」があり、それぞれで研究が完結する構成になっている。また「研究 1」は、「研究 2」の前提になっている。この論文は、その連続する2つの研究を行うことが必要な「問題と目的」、それらをふまえてなされる「まとめと今後の課題」部分がある。

# 「問題と目的」の構造

段落ごとに要約し、流れをつかむと…

- ① 進路選択過程を理解することの重要性を指摘
- ② 先行研究レビュー → 価値観が重視されてきた
- ③ 「ところが」で始まるように、従来の研究の流れに対する疑念、課題の指摘
- ④ これまでの価値観に関する深堀
- ⑤ 「しかし」で始まり、当事者視点で働くことの捉え方を検討する必要性が提起される
- ⑥ 望ましさにとらわれてない「イメージ」概念の提案(本研究の特徴)
- ⑦ 「ところで」というサインがあるように、話題転換。社会の変容へ着目する流れを示す (⑧を述べるための前提)
- ⑧ 「働くこと」でも、その中の「就職すること」に限定する宣言
- ⑨ 以上を総括し、本研究の目的を明示。就職イメージを検討し、尺度を作成する。
- 一見,長い文書のようにも見えるが,「問題と目的」部分の構造はかなり単純である。大抵は,最初に問題のありか(問題に対する研究者の視点)を示す導入部分,最後にこの研究

の具体的な目的が配置される。その間に、冒頭の問題とした事象の解明に向け、本研究の目的が必要となる論理(目的の必然性)を記述する。

先行研究は、問題とした事象(その解明)に関連して、何がどこまでわかっているかを説明するために利用されることが多い。換言すれば、何がまだわかっていないかを特定するため。そのため、「先行研究の紹介+逆説(「しかし」「ところが」など)」のセットが頻繁に見られる。さらに、そこで明らかになった不明な部分へアプローチすることが研究の本質なので、そのための新しい提案がなされる。こういうところでは「本研究では」という表現がよく用いられる。

研究は、不明なことに説明を与えよう(知ろう)とする行為であり、仮説(探索的な研究の場合の前提を含む)を用いてこれにアプローチするということを踏まえておけば、「問題と目的」の構造は把握しやすいだろう。

# 「研究1」の構造

「目的」のパート

大学生がどのような職業イメージを有しているのか<u>探索的に</u>検討 社会人の職業イメージと比較

探索的に検討 → 仮説検証ではない。先に職業イメージは研究されていないことが明示されている。つまり、データから知見、仮説を組み上げることになるだろう。 面接や自由記述などのデータ収集か。そういうデータだとすると、KJ 法などを使って、要約、分類することになるか…、という予測ができる。(経験知から)

#### 「方法」のパート

一般的に、「(a)誰に対して、(b)いつ、(c)どこで、(d)どのようなものを、(e)どのような方法で」実施したのが伝わる内容で構成する。この論文は、左小見出しのレベルで、「調査対象者」、「調査時期」、「調査内容」の3つから構成されている。「調査対象者」は (a)、「調査時期」は(b)、「調査内容」は(d)に関する情報といえる。この論文では、(c)と(e)の情報が明らかにされていない。

この部分の内容から、以下のような質問に対する記述データが得られることがわかる。

- ・今の自分にとって、就職するということはどのようなことですか
- ・就職に対してどのようなイメージを抱いていますか

「結果」のパート

自由記述回答を,一つずつの意味内容に分割。

#### A. 数について

その数(一人の回答に含まれる意味内容の数)に注目し、全体の平均を算出、男女、就業の有無による差を検討している。就業の有無による差が認められる。

## B. 内容について

KJ法によって分類。30の意味内容に分類でき,就業の有無別に出現率が整理される(Table 1)。

p.17 「α」からの2段落は、Table 1 に示した結果の紹介。ただし Table 1 の一部に対する言及のみである点に注意。結果全体は Table 1 に提示済みなので、文書で言及するに値する部分のみが取り上げられる。言及するに値する部分とは、目的との対応、特徴な点、以後の展開などの観点から、著者が言及すべき(読者の目を引いておくべき)と合理的に判断した部分。すべてを文章でも書いてしまうと、表と重複することになりルール違反になる。

また「結果」部分なので、結果として得られた事実だけを述べる。解釈は考察のパートで 行うのが通例。

# 個人的に気になる点

「…これらは社会人において相対的に想起されやすいイメージだといえる。」 これは「断定」の表現であるが、通例として、断定を用いるのは事実をあらわすか、 演繹的推論の結果、検定を行った結果の3つほどだろう。ここは「いえよう」「指摘 できよう」くらいの推測表現の方が適切ではないか。強く主張したいという理由で 断定を使うのは論理的ではない。

# 「考察」のパート

考察の出だし部分には「おやくそく」がある。目的の再掲と結果の要約の2点であるが、 この論文でも考察の1段落目でそれが示されている。

それに続き、記述数、記述内容、大学生と社会人の差、従来の研究との比較といった順で考察が行われている。それを通して、掲げた目標(大学生がどのような職業イメージを有しているのか、社会人の職業イメージとの比較から把握する)に対する回答を述べていく。

考察は、結果を踏まえて、また先行研究の知見とからませて目的に対する回答を述べていくので、文の語尾に特徴が生まれる。結果や先行研究の知見という事実を踏まえて考えた結果(帰納的推測の結果)なので、それは推測されたことになる。それゆえ「考えられる」「だろう」という表記が多くなる。こういう場合に断定の表現を使うと、論理的でないと評価される。

# 「研究2」の構造

#### 「目的」のパート

研究1の結果を踏まえて職業イメージ尺度を作成する

就職イメージの構造を明らかにする

職業レディネス、職業選択課題認知との関連を検討する(妥当性の確認)

性差, 学年差について検討する

(尺度の) 構造 → (尺度の) 構造という場合, 大抵は因子構造のことを指す

「方法」のパート

見出しを追う

調查対象者

調査時期

調査内容

- 1. 職業イメージ尺度
- 2. 職業レディネス尺度
- 3. 職業選択課題認知尺度
  - ●調査内容として尺度が用いられている場合… 既存の尺度を用いた場合は、以下のような内容が記述される
  - ① 何を測定する尺度なのか
- ② 因子構造や各因子はどういうものなのか
- ③ 項目例,項目数などの情報
- ④ 回答方法

新しく尺度を作成する場合は、②がなく、かわりにどのようにして項目を準備した のかという過程が比較的詳細に記述される。

読む場合も書く場合も,「問題と目的」部分で論じられた概念と,具体的に測定に用いた 用具との対応を明確にしておく(何を何で測定したのか)。

なお,以下のような情報も記述される(記述されない)場合がある

- ・版権、著作権などの関係から、詳細まで記述できない場合がある
- ・利用した統計処理ソフト(バージョンを含む)が示される
- ・倫理審査に関する情報(脚注にする場合もある)

「結果」のパート

見出しを追う

因子分析と構成した尺度の信頼性

下位尺度の妥当性性差と学年差の検討

この論文では見出しが付けられているが、付けていない論文も多い。しかし、結果の内容は「目的」と対応させれば理解がはやいだろう。結果は、目的に達するために必要な情報だけを記述する。この論文では、「目的」と結果の見出しが一致しているところに注目。

#### 「考察」のパート

見出しは「就職イメージ尺度の作成」と「性差と学年差の検討」の2つ。結果の見出しと は異なるが、妥当性の確認は尺度作成の過程に含まれる(妥当性が認められてはじめて、し っかりした測定ができていると判断されるため)ため、この研究の目的と整合している。

# 「まとめと今後の課題」の構造

この論文は2つの研究から構成されている。複数の研究によって構成される論文の場合、最後にそれらを踏まえての検討がなされる。なお、たとえば2つの研究が含まれる場合、「1と、1を踏まえての2」という連続的な場合と、一つの目的に達するための「1と2」という並列的な場合がある。それによって、最後の部分の記述内容は多少異なる。

本論文の目的は「就職イメージを検討し、尺度を作成する」ということであり、その構造は「1と、1を踏まえての2」という連続的なものなので、考察的な内容はそれぞれの研究の考察で述べられている。「1と2」という並列的な場合は、見出しを「総合的考察」などとする場合が多いが、「まとめ」とされているのはこういう理由ではないだろうか。実際、記述されている内容は、研究のまとめのような内容が多い。また「考察」における「おやくそく」の一つである今後の課題は、それぞれの考察ではなくここにまとめられている。

#### まとめ

先に「研究は、原因・原理(もしくは予測や制御)について「知りたい」、「わかりたい」、「はっきりさせたい」…といった動機から、そのため(原因・原理(もしくは予測や制御)を明らかにするため)に、知るという過程を歩むもの。論文には、これらのことが書かれている」と記した。この論文も、「進路選択過程を理解することの重要性」を指摘するところから始まり、そのために「就職イメージを検討し、尺度を作成する」という目的を掲げ、それに対する回答(就職イメージは…な特徴をもつことを知ることができ(説明できるようになり)、それを測定する適切な尺度を作成できた)を示すところまでの過程が明記されている。

探索的研究であるが (ただし、尺度の妥当性の検討部分は必ず仮説演繹法の形になる),

当事者視点で働くこと、特に就職することに対する捉え方を検討することで、進路選択過程の理解が進むであろうという大前提(仮説)がある(「問題と目的」で論じられている)。その上で、就職することに対する捉え方について探索され結論が導かれている。研究の形式から、この研究の結論は新しい仮説の提示である。この知見(仮説)の正しさや、本当に進路選択過程の理解を進展させることができるかどうかは、その後の研究にゆだねられる。

なお、こういう論文に対して、「実践への示唆をもっと述べるべき」などいう、執筆者へのお願いが出てくるのは容易に想像できる。これをクリティカルな意見、提案ということはできない。なぜなら、それは研究の目的に入っていないからである。もしそういう内容を考察に入れたとすると、研究論文としては成立しなくなってしまう(目的に無い考察を行っているため)。また、たとえこの結果から示唆を(無理やり)導いたとしても、それは根拠の不十分な提案にしかならない。「実践への示唆をもっと述べるべき」と感じたならば、それは研究の芽になるものなので、自分の中で大切に育てるべきだろう。

#### 5. おわりに

今回、論文を読む、書くという技術の獲得に向け、どこにどういう目を向けるべきなのかという観点から話を進めてきた。主たる点をまとめれば、まず論文として記述される研究 (特に科学的なアプローチ)について知り、研究は一定の形/型(枠組み)を持っていることを理解するべきなのだろう。論文の形/型は、研究の形/型によって決まっているので、この形/型さえ理解してしまえば論文は読みやすくなり、研究も理解しやすくなると考えられる。さらにその形/型にはめて研究を行い、形/型を整えて文書にすれば論文になるはずである。そしてこの形/型の理解には、形/型に意識を向けながら短期間に多くの論文を読み、共通点や相違点を整理するのが有効ではないかと思っている。

研究指導者はなぜ指導ができるのか、論文をなぜ査読できるのか、なぜ修正の方向を示せるのかといったことを、一度考えてみていただきたい。研究も論文も、オリジナリティを発揮して自由に作ることができるものとすれば、指導や査読はとても困難なことになる。一定の形/型があると、それに沿っているか否かは判断できるし、進むべき方向を示すことができる。研究や論文には形/型があるから、指導や査読が可能なのだと考えている。形/型に目が向けば、論文を読む、書く学習は進展しやすいのではないだろうか。

キャリア支援, キャリア教育を計画したり実践したりするうえで, あなたは対象者や内容 について何を知っているだろうか。そして, 何を「知らない」だろうか。

研究は「知らない」ことへに気付くところからはじまる。そして、それを知る過程を歩む ものである。論文はその歩みが記されている。本会会員が「知らない」ということに敏感に なり、キャリア支援、キャリア教育に活用するために「知る」「正しく知る」ことに貪欲に なって、結果として研究知見が蓄積されいくようなることが学会として望ましい姿だろう。 「固執」や「権威」、「常識」に基づいた支援、教育が少しずつでも改善、改良されていく ことを願っている。そのために、科学という方法や研究、研究知見が有効利用されるように。

# 引用文献

伊丹敬之 2001 創造的論文の書き方 有斐閣

戸田山和久 2005 科学哲学の冒険―サイエンスの目的と方法をさぐる NHK ブックス 戸田山和久 2012 新版 論文の教室 NHK ブックス

Ray, W. J. 2003 *Methods toward a science of behavior and experience*, 7th ed. CA: Wadsworth Publishing. (岡田圭二訳 2003 エンサイクロペディア心理学研究方法論 北大路書房)